

F・W・パーカー教授学の社会的観点

—Morning Exercise について—

高 田 喜久司

はじめに

パーカー (Parker, F. W., 1837—1902) の教授学を仔細に検討してみると、時間的な経過につれて、その主張に微妙な変化や発展のあることを感得することができ、特に、クック郡師範学校長 (the principal of Cook County Normal School) に就任した一八八三年以降、「学校における社会的要素」を強調するようになったことは、それ以前の教授理論にはみられない新しい観点である。「教育は本質的に社会的な過程である」とパーカーが言うのは、こうした事情を端的に物語っている。

ところで、パーカー教授学の社会的観点は、二側面から把握することが可能であろう。一つは、彼のコモン・スクール観 (the outlook of common school) において顕著にみる事ができる。彼はコモン・スクールを、「人類進歩の最高の成果である」と評価し、さらに「学校は典型的な家庭、完全な共同社会、萌芽的な民主主義でな

ければならない」と喝破したことはあまりにも有名である。そして、「世界唯一の希望である民主主義は、有効なコモン・スクールなくしては不可能である」と断定するのである。かくして、彼はすべてのアメリカの子どもに、階級、貧富、男女の別なく、利害、宗派を超えた万人共通 (common) の教育制度を樹立することを要請している。これを筆者は、社会的観点のなかでも「外的側面」と呼称したい。

外的側面と密接に関連し、補強する意味で強調されているのが、学校内での Morning Exercise (「朝の儀式」と訳せるが、ここでは原語のまま使用する。以下 M・E・と略称) の理論と実践のなかに見出すことができる。これがもう一つの側面である。M・E・の理論と実践の背景には、つぎのような考え方が潜在していると言つてよからう。

「教育における社会的要素は、他のどの要素——すなわち、原則、方法、教科、さらには教師——にもまさる。

「人類の最高の学習は人間である。心と心との触れあい、他人の人格についての知識、短所と長所の認識、義務感……共同社会の善のために投げだす無私 (unselfishness)、これらによつて書物による学習以上に、子どもは自らの成長に必要な教訓 (lessons) を習得する。」⁽⁵⁾

この陳述からも分かるように、一般に子どもは教師や教科書から直接学ぶと同時に、自分の仲間からもより多くのことを知らず知らずのうちに学ぶという、いわゆる無意識的学習と相通する面があることは否定し得ない。その端的な現れが、しだいに明らかとなるであろう M・E・の精神と言つてもよからう。これを筆者は、社会的観点の「内的側面」と位置づけたい。

外的側面についてはすでに触れてきているため、本稿ではパーカー教授学の内的側面としての M・E・に焦点をあて、その目的あるいは価値、さらにどんな主題 (subject,あるいはtopic) をとりあげて実際に実施していたのか、そして M・E・の今日的意味にも言及できれば、と考えている。それは、パーカー自身が「学校生活の社会的様相を強調するためには、M・E・を取り扱わねばならない」と言い、さらに「最も体系的で、効果的な社会的刺激は M・E・である」と指摘しているからで

もある。M・E・の考察をぬきにして、彼の教授学における社会的観点を論じたとしても、それは片手落ちと言つてもよい性質を有するものであらう。

当然のことながら、アメリカのポピュラーな教育史家もパーカー教授学の特徴として、「Morning Assembly を論議の対象としている。例えば、ラッグ (Rugg, H.) はクック郡師範学校の実践の一特色として「毎朝、学習したことや興味のあることについて、自由に発表する朝の集会」⁽⁹⁾をあげている。同様にクレミン (Cremien, L. A.) も Morning Assembly を、「各人が自分の捧げものを持ちよる学校の家庭祭壇 (the family altar of the school) である」と定義し、その概略についての説明がみられる。しかしながら、これらはいずれも M・E・の一端を略述したにとどまり、筆者が意図しているような具体的、かつ全体的な様相を知るには必ずしも十分であるとは言いがたいのである。

わが国における先行研究もラッグやクレミンからの引用が中心であり、二人の所論の域を脱していないのが実情である。

全体的な様子を探る基本的な資料として、筆者はとりわけ、「Francis W. Parker School Yearbook,」 vol. I

Social Motive in School Work, 1912 及び vol. II The Morning Exercise as a Socializing Influence, 1913 に求めたことをあらかじめ付記しておきたい。これらは F・W・パーカー・スクールの教育実践の記録を年報の形で提供したものである。その意味では、M・E・について体系的、かつ細部にわたる実践を理論的に素描するには恰好の資料となる。年報が公刊された頃、すでにパーカーは没していたが、常に彼の素志にたちかえり、それを生かそうとする記述の姿勢が一貫してとらえられている点を考慮し、筆者はあえてパーカー教授学を考察する直接的な資料と判断し、検討を加えていくこととする。

1. Morning Exercise の概要

M・E・とは一体何か。どのような実践形態をとっていたのであろうか。M・E・の目的や価値を論ずるに先立ち、この疑問を解決しておかねばなるまい。M・E・の概要を知るとは、以下の所論の理解を容易ならしめるものと考えらるからである。

そもそも M・E・は、クック郡師範学校の daily assembly に対してパーカーが与えた名称であり、そこに

起源があると言う⁽¹⁾。その背景には、人間の心のなかには仲間と一緒に物事を実行する生得的な欲求がある、という認識に支えられている。

「未開人は踊りと儀式を有している。宗教には現在、宗教儀式や儀礼がある。われわれは今もパレードをしたり、懇親会を開いたりする。M・E・はこうした欲求を子どもに満足させてやるのである。子どもは見たり、想像したり、模倣することによって行動にあらわす衝動をもっている。M・E・は毎朝、秩序ある会合でこの衝動を満足させてやるために計画的な機会を与えているのである。」⁽²⁾

パーカーは未開人や宗教界、さらには共同社会の形態や要求にヒントを得て、M・E・の構想を樹立したといえよう。こうした認識や構想を受けて、計画的な機会を与えるべき学校では、具体的に M・E・をどのように規定しているのであろうか。

「学校はわれわれが共に生活する場所である。日常生活の大部分はここで過ごされ、……一つのファミリーをなしている。各学年は事情があつて分割されているにすぎない。各学年は学年自体の課業をおこなっている。そして、共通の会合の基盤 (meeting-ground) となるのが

M・Eである。すなわち、それは各人が供物(offerings)、つまり経験、観察したこと、あるいは彼を樂しませてくれる音楽、文学、芸術を持ちよる家庭祭壇である。」⁹³

換言するならば、M・Eはすべての子どもがすべての教師や他学年の子どもと出会い、すべての子どもが全体の喜びと幸福のために協力しあう場所であり、最善かつ最も精選された経験を持ちよる場所を提供するものであった。もし、そうした場所の提供がないものと想定するならば、子どもたちは自分自身のうちや自学級に閉じこもってしまい、パーカーが最も嫌う自己中心的で、利己的な人格の持ち主となることが予想されるのである。それは他人の人格や生活、興味の何たるかについての知識を欠くものであり、その結果他人とのトラブルが絶えることなく、学校は無味乾燥で平板な、それこそ堅い骨のような生活となつてしまうことは疑う余地がない。こうした危惧の念に歯止めをかけようとするところにM・Eの意義を見い出すことができる。

「M・Eにおいて一緒に会合するということは、お互いが認識しあい、真の友愛感情をひき起こし、子どもや教師が他の子どもや教師の人格と接触することになる。また、他の学年や部門(department)の考えや課業

を知ることにもなるのである。」⁹⁴

こうした会合は、古い形態の district school に代るものであるとパーカーが指摘している点は注目してよからう。古い時代の district school は、one-room school の形態をとることが多く、学習、運動、休憩時を問わず、年令や能力のちがう子どもたちが一つの教室で生活し、お互いが長所、短所を認識しあい協力しあつて、それぞれの課業に励んでいたのである。こうした事実を出発点として district school を現代的にとらえ直し、パーカーはM・Eに新たな意味を付加しているのである。

それでは、district school の現代版としてのM・Eの実践形態はどのようなものであったのだろうか。その大要を示すとつぎのようである。

「毎朝、ベルが鳴ると幼稚園を含む小学校、ハイ・スクール、師範学校生徒と教職員を含む八百人のメンバール全員が、体育館の所定の席まで行進していく。すべての者は自分の席をもっており、教職員はパーカー大佐と一緒に席につく。遅刻や欠席は許されない。整列は堅苦しく、真つすぐでなければならぬ。儀式は形式的なものであり、慎重に準備された。部屋があまりにも広いので、ホールいっぱい子ども声が届くように前もって訓練

されねばならなかった。……開会の替歌 (Hymn) はみんなのためのものであり、時には聖書の一部や詩から採られた。それに続く儀式は短いもの——すなわち二十分を越えることはなかった——であった。そして、それは文学、自然研究 (nature study)、ある祭や歴史的な行事を祝した教室課業の所産であった。」

「パーカー自身、毎朝司会をし、心のやさしい専制君主の態度をよそおい、子ども、職員、学校について善意ある家族的な (paternalistic) 態度をみせる。……専制君主であるにもかかわらず、彼は子どもたちや同僚から十分に愛されていた。ママ、パーカー大佐は今日、私の頭をなでてくれたよ。彼はイエスさまがまさにそうであったように、子どもたちを祝福していると思う」とある曰、学校から帰った子どもがこのように母親に話していた。」

最初の整列や行進などは堅苦しい面もあり、形式的な雰囲気強いようであるが、時間の経過につれて形式にとられない家庭的な雰囲気を醸しだしていったようである。M・E・を終えると、子どもたちはそれぞれの教室へ入っていくのが日課となっていた。

M・E・は、現在で言うところの「全校朝会」「学校行事」の一部に相応するものと言ってよく、学校全体の統

一をめざすものであった。そこでの子どもは、市民の権利と義務を賦与された共同社会の市民と考えられたのである。そして何よりもM・E・は、多くの教室の授業に生命を与えるものでなければならぬことは肝に銘ずべきであろう。

このような家庭的な雰囲気の集会活動が、学校経営の中核となり、パーカーの学校の名物とされたのである。以上の記述から明らかなように、まさに「学校は典型的な家庭、完全な共同社会、萌芽的な民主主義でなければならない」というパーカーのテーゼが、M・E・において生きていたと言っても過言ではなからう。M・E・は生活共同体としての学校のあり方を印象づける教育実践であったと考えられるのである。

二、Morning Exercise の目的

あるいは価値

M・E・の教育実践が軌道に乗るまでには、かなりの紆余曲折した道があったようである。その最大の原因は、パーカーが当初意図した目的からその実践が離れてしまったこと、に求めることができる。実際、パーカー・

スクールの在籍者が百五十名から八百名に膨れあがってしまい、特にM・E・への参加者の態度が問題視されるようになった。

子どもたちが喜んで参加しているのかどうか。聴衆は怠慢でなかったかどうか。発表する主題が純粹に社会的な意味をもつものであったかどうか。そして発表そのものが、他学級へのみせびらかしになっていなかったかどうかについて、職員会議 (faculty meeting) で検討された。¹⁰⁸⁾ その結果、M・E・は教育計画のなかで最も楽しく価値あるもの、多少の犠牲を払っても価値ある重要な意味をもつものであり、究極的には当初の原則にたちかえって、それをよく理解すべきであることが再確認されたのである。

それではM・E・の価値あるいは目的とするところは奈辺にあつたのであろうか。前節で概観したように、その目的とするところはあくまでも社会的なものであつて、共同社会におけるさまざまな影響を統合するという積極的な意味をもつものでなければならなかつた。それは、パーカーの作業仮説 (working hypothesis)——すなわち、「①社会の要求が学校の課業を決定すべきである ②社会の最高の要求は良き市民である ③理想的な市民

は個人に最高の知識、能力、技能を必要とする ④学校の唯一の目標は、進歩の諸条件を提示し、理想的な市民にすることにある。」——が具現されるように企図されている。

すなわち、パーカーは子どもを理想的な市民に訓練することが学校の義務であると考えていた。全体と個の責任を感じさせるとともに、理想的な市民としての権利と義務を学習させることにそのねらいをおいたのである。それはひとえに「他人のためにいかに生活するか」、つまり民主的で利他主義的な市民に基礎がおかれ、それをいかに子どもに教えるかが彼の学校の課題であつた。

そのためにいろいろな方法が模索され、より具体的にはM・E・において社会が要求するものを主題としてとりあげ、変転する社会に必要な順応性 (adaptability) を身につけさせること¹⁰⁹⁾。さらに、年長者と年少者を交流させることによつて、お互いが理解と同情を深めることが要請されている。後者については、年少の子どもは年長の子どもと接触することによつて、正常な授業よりも多くのことを学習することが可能であり、そのことによつて社会的な視野を広げることができよう。逆に、年長者は年少者の子どもに助力を与えようとする精神や、小さ

な子どもたちが現在、どのような興味や経験をもっているかを実際に洞察する力を獲得することができる。こうした過程をいく度となく繰り返しながら、最終的にはパーカーが意図した「共同体としての良き市民」を育成、啓培することにつながったのである。

しかしながら、パーカーはこれらの目的とは別に、M・E・には語られざる (untold) 教育的価値もある、と述べていることは看過できない。つまり、彼は、M・E・では多種多様な作品発表や体験発表の機会を与えるが、それによって表現力 (expression——描画、塑像、歌唱、劇化——) を培うには理想的であると考えられた。例えば、エジプトの米作地帯、インドのけし地帯をクレヨンで塗るような表現活動が言語記述を補う意味で用いられたことなどは、その好例である。さらに、共通の目的のもとに、一緒に作業し、効果的な表現の仕方を求めて没頭しなければならぬがゆえに、集中力 (attention) を養う点で教育的な価値があると考えているのである。表現力と集中力を涵養することは、パーカー教授学を構成する重要な要素である。要するに、パーカーは理想的な市民の資質と附随して、表現力や集中力を高めるところに、M・E・の教育的価値を求めているわけである。

「M・E・は思想を強化し、エネルギーを集中する知的刺激 (intellectual stimulus) として作用する。そして表現衝動を調整、コントロールすることによって構成的な能力、……さらには秩序や礼儀のためにおこなわれ、学校を統合し、子どもに学校という共同社会の一市民としての位置と義務を教える重要なフアクターとなる。かくして利他的な思考と生活における健全な訓練ができあがる。」⁽⁴⁾

結局、M・E・は子どもがこれまで学習したことを強化し、エネルギーを集中する作用があること、秩序や礼儀正しさが要求され、学校の課業を統合するものであること、学校という共同社会の一員としての個人の位置や義務を感得できる重要な要因であると結論づけられよう。

しかし、M・E・は理論によって教育的価値が判断されるのではなく、あくまでも子どもの生活や人格がどのような影響を受けたか、「子どもにたちかえって」その価値を判断すべきであるとの注意を促がしている点は重要な見解である。⁽⁵⁾ ここには、子どもを中心とする生活共同体としての学校観が顕著にみられ、その現象形態が民主主義社会のモデルとしてのM・E・であると言つてよかる

う。したがって、パーカーはこれらの目的あるいは価値こそが社会的な教育 (social education) のエッセンスである⁽⁴⁾と豪語するに至るのである。

III' Morning Exercise の主題

つぎに M・E・では、どのような主題がとりあげられたのか、の検討に移りたいと思う。すでに断片的ながら述べたように、M・E・は朝の二十分間という時間が決められていること、文学、歴史、自然研究、国家的な祝祭日や歴史的な行事を祝うような主題が考えられていたのである。これらの主題は、表のように、あらかじめ一ヶ月分が決められており、M・E・ではすべてのクラスが一年間、決められた数の主題について発表しなければならぬものとされていた。表の数字は日付、つぎが主題名、最後にリーダーの名前が掲げられている。十月の例でみると、十月一日はおそらくパーカーが校長として、みんなの前で何かを話したようである。それ以後は表に示したような主題について各学年ごとに追究し、それを発表したものと考えられる。

この表は、一ヶ月分の主題を示したにすぎないが、そ

れらはもつと多彩であったようである。そしてこれらの主題は、大きく二つのタイプに分けることができよう。一つは daily exercise の主題であり、もう一つは

表—10月の Morning Exercise

		LEADER.
October 1.	Colonel Parker
2.	Nature Study	Mr. Jackman
3.	Current Events	Miss Rice
4.	The Worlds Around Us	Mr. Myers.
8.	Vacation Reports	Mrs. Thomsen.
9.	Some Beautiful Books	Miss Warren
10.	October	Miss Mitchell
11.	Field Observations	Miss Baber
15.	Pictures	Mr. Duncan
16.	Fruits	Mrs. Norton
17.	Current Events	Mr. Flint
18.	Autumn Colors	Miss Crawford
22.	Field Observations	Mr. Meyers
23.	Rivers	Miss Stilwell
24.	Stories	Miss Wygant
25.	Pottery	Miss Hollister
29.	Nature Observations	Mrs. Atwood
30.	Home Life	Miss Allen
31.	Hallowe'en	Miss Payne

special-day exercise の主題にあつた。

(一) daily exercise の主題

通常、野外旅行 (field trip) や自然研究においてなされる観察結果の発表のように、教室の授業から発展した主題でなければならなかつた。「すべての主題は、実際には学級や学年における生活から発芽し、開花すべきものである。したがって、授業を妨げるものであつてはならない。授業での学習を強化し、活性化するような性質をもつもの、授業に目標と形を与え、子どもの成長や思考能力、彼らの表現上の技能を最善のものにする主題が望まれたのである。

具体的には、表からも明らかな野外観察、農場見学、工場や美術館などを訪問した時の話、世界の大事件や時事ニュース、子どもたちを喜ばせてくれる物語や空想小説、詩、音楽などをそれぞれが分担して発表する形態をとつていた。ここでは主題を計画し、組織する際の意義について典型的なものに限定して概観しておこう。

(1) Nature Study (自然研究)——めぐりくる歲月 (rolling year) と密接することによつて学校を経営すること、そしてさらに変化する自然、その自然が与える暖

かい感情で子どもたちを包んでやるのがわれわれの目的である。野外遠足と実験室での研究の結果は、記述や絵画芸術の形で M・E・に導入されなければならない。学校全体は、すべての学級、すべての子どもの経験と親密に共感することがなければならないからである。

(2) Current History (現在の歴史)——教育において現在を犠牲にして過去の歴史を教授することほど大きな誤りはない。電信、新聞、雑誌は、南アフリカ、フィリピン、キューバ、ベネズエラ、さらには地球上のすべての地域から毎日、われわれにニュースを届けてくれる。すべての教師は現在の歴史を教授しなければならない。少なくとも一週間に一度は、最も重要な事件が学校全体に提供されるべきである。誰もが一片のニュースを語る時間が与えられなければならない。かくして、子どもたちは新聞にある最善の記事を読むようになるであろう。

(3) Maps (地図)——現在の歴史は、常に地理学と密接に関連づけられている。参考にするために世界の大地図がチョークで描かれ、ホールの壇上になければならない。事件があつた国の地図は黒板に描かれねばならない。

(4) Arts (芸術)——朝は時折、音楽に充てられるべきである。音楽は統一や社会化に大きな影響がある。学校

全体を最も精神の集中した方向に向かわせるものである。力を合わせることにその訓練には必要である。実際、すべてのM・E・を例証し、刺激を与えるためには、音楽とならんで描画、彩色などの絵画芸術も必要である。

(5) Literature (文学)——童話、名作文学、世界の物語、空想小説やユーモア小説の一場面、感動的な叙情詩などの活気ある場面と接触することによって、子どもたちを毎日最も単純で、自然で、効果的な方向へと導いてくれる。子どもたちはリズム、音色、感情に敏感であり、名作文学を聞いて声を発する。つぎに、無意識のうちに登場人物を演ずるように意図されるべきである。毎朝の一善は美しい思想を蓄積することを意味する。

(6) Health (健康)——善良で、健全かつたくましい身体生活は、朝においておこなわれ、それは体育によって例証される。

(I) Special-day exercise の主題

daily exercise とならんで「感謝祭」「クリスマス」「偉人の誕生日」「国家的な祝祭日」など Special-day exercise といわれるタイプの主題がよく導入された。先の表では、十月三十一日の Halloween がこれに該当しよう。

Special-day exercise は daily exercise から発展したものであり、子どもが容易かつ自然に参加することのできるものが望まれた。これらの主題を導入する意図はどこにあったのか、検討を加えてみたい。

(1) Thanksgiving Day (感謝祭)——これは自然の偉大なクライマックスである収穫祭である。感謝祭は学校を、人間生活の美しい有意義な場面へと連れていってくれる。清教徒だけが神の慈悲深い贈り物に対して感謝するのではない。時代を問わず、すべての人類が天の恵みに対して感謝の念を表現してきたのである。子どもは具体的な例証——劇や絵画的芸術——を経て、過去に入ってゆかねばならぬ。子どもは感謝のための奉納物をもってきて、未開人、野蛮人、文明人を問わず、感謝祭を祝ってきたという点に啓発され、精神が広げられていくのである。

(2) Christmas (クリスマス)——暗さに対する光の勝利、悪事に対する善事の勝利、光であるキリストを祝うものである。東洋の賢者の物語は、普遍的な真理と尊敬の念を教えてくれる。両親や友人に子どもたち自身がつけたものを贈ることは楽しいことであり、偉大な日となる。クリスマス・ソングや物語や絵によって、他の国

や時代のクリスマスを中心に留めておく方法を一瞥することになるであろう。

(3) Easter (復活祭)——新しい春の生活、精神の再生、キリストの復活を意味する。

これらの祝祭日の歴史や異なる祝い方を学習することは、地球上の人々の生活や習慣、衣服や礼儀作法のあり方へと導いてくれると同時に、彼らの精神生活、抱負や希望の微光 (glimpse) をわれわれに与えてくれる。それは歴史の連続性、民族の統一、人間の兄弟愛を教えてくれるものである。

(4) その他の祝祭日——ワシントンの誕生日は、国家の誕生や初期の国家の陣痛を示すものである。リンカーンの誕生日や Memorial Day (戦没将兵追悼記念日) は、人間の奴隷状態に対する国家的闘争のすばらしいクライマックスである。そのためには、われわれの国家の運命を形成する人々がゆり動かす純粋な民主主義の精神を理解することなしに、これらの日を祝うことはできない。

これらは確かに、すべてのアメリカの少年少女に賢明な教訓を与えてくれるからである。また、Independence Day (独立記念日) は、爆竹や騒音より以上に子どもに重要な意味をもつ。それは愛国心、自己犠牲、自由を求め

ての闘いによって得られた教訓である。

祝祭日への取り組みは、全校で共通の目標を設定し、その一部を分担して各学年がそれ相応の立場をふまえて実践に移していったようである。

「これらの儀式について、最もすばらしいことの一つは、自分のパートを実行するための準備をすることに、おいて最も真剣になること、助け合いの精神が無意識的に健全な方向において刺激されること、学年や子どもたちの集団は共通の目標に向かって一緒に動きだし、主題やその表現に没頭するようになる。そして、子どもたちは、学校のすべての手段、つまり教師、図書館、文学、芸術、音楽を活用するようになるであろう。」⁽³⁾

両タイプの主題は、いずれも二十分でできる短いもの、さらには教師の指導と協力によりまとまりのあるものに、発表の場所を考慮して適切なものが計画され、組織された。以上の条件とあわせて、つぎのような主題が最も良いものとされた。

「子どもたち自身が、しばしば主題を暗示してくれる。彼らがある授業について、特にほめられたり、happy である時、それを M・E・にしよう」と叫ぶ。子どもたちが持ちよるのが最善である。」⁽³⁾

授業の発展として、子どもたちの必要から生じ、子どもたちが持ちよるものが最善の主題と考えられたのである。

逆に、「学校の授業を妨げるもの、子どもが組織することができず、時間とエネルギーを浪費するもの、さらには不当な興奮や精神的な緊張を助長したり、利己的な活動へと導く、みせびらかし (showing off) をするようなもの」⁽³³⁾ はよくない主題である。M・E・は「ショーや単なる誇示 (exhibition) を試みるものであつてはならない」⁽³⁴⁾ からである。

IV' Morning Exercise の実際

M・E・への準備は、かなり慎重かつ念入りにおこなわれたようである。準備が不十分で、急いで実行されるのであつては何の利益にもならないからであろう。準備が慎重であればあるほど、M・E・は教育的に最善の間となるはずであり、一連の授業の極致が提供されるという確信があるからである。

それでは、M・E・は実際にどのようなおこなわれたのか、そのごく概略について検討することにした。こ

こでは Special-Day Exercise の代表例である「クリスマスの実践」と daily exercise のなかから第四学年が取り組んだ「ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) に関する主題の実践」の二例をあげてみることにする。

(一) クリスマスの実践

クリスマスについては随所に述べられており、ポピュラーな実践といえよう。これらの実践の背景には、大要つぎのような考え方がみられる。

良き市民なら、学校がしだいに子どもに社会的な正義を発達させるように要求するであろう。幼稚園や低学年の自己中心的個人は、学年がすすむにつれて、他人の権利を尊敬し、認識するようになり、より同情的で寛容な態度を示すようになるものである。そのためには、自分のことだけを考えるのではなく、共同社会全体についてより多くのことを考えることが必要とされる。子どもの側に利他的な社会奉仕を求める条件は、学校において作られるべき性質のものである。子どもの社会的な視野は、個々の教室の壁によつて束縛を受けているが、社会奉仕への興味は学校全体に広げ

られなければならない。

「クリスマス」は、学校の他のいかなる時間よりも大きな社会奉仕のための特別な機会を提供するものであった。その目的は、「子どもの側に、あまり恵まれない環境にある他人に対して、共感的で尊敬すべき態度をつくりだす」ところに求められた。これがクリスマスの精神である。クリスマス精神によって、学校で主張される協同的で利他的な線にそつた人格陶冶が期待できるものとされた。助力、共感の精神や身体的な活動が適切に計画され、涵養されるなら、子どもは将来にわたつて、健全な印象を確保し、存続させることが可能となるのである。

「子どもは学校時代に giving や sharing の問題に、適切に注意を集中することができれば慈善事業 (charity work) や都市改善運動 (movements for civic betterment) の知的興味に対して、正しい態度を啓発することになる」であらうし、ひいては「クリスマスで実行したことは、公民科 (civics) や経済学の体系的な研究と結びつけられる」ものと考えられた。そのためには、正義と平等をすべての人に保証する理想の条件が提示されなければならない。

たとえ、個人であろうが社会人であろうが、将来、慈

善的なものへと努力する適切な態度を發展させることができなるとしても、民主的な環境下にある子どもたちの利益は、それなりの価値ある要因とされたのである。

ところで、クリスマスの精神を具現するために子どもが参加する程度は、学年に応じて多彩であった。低学年段階の子どもは、直接的な参加の度合いは少ないが、学年が経るにつれて救済活動を展開するなど、より直接的な参加形態が多かつたようである。物語や劇を作る学年、クリスマス・ソングを作つたり、両親や友人への贈り物を作る学年もある。また、外国のクリスマスのように遊ぶる学年も登場する。その基底には、構成的興味や遊戯的要素に訴えることが顕著にみられた。

特に、以下の記述は主としてハイ・スクールの生徒を中心として全校を動かした実践の概略である。

クリスマスが近づくと、まず家庭や他クラスを訪問して情報を収集することに勢力を傾注する。その手段は、閲覧板を両親の会 (The Parent's Association) にまわして、この仕事の助力をあおぐ。集められた情報をもとに、再び家庭や他のクラスを訪問する活動へと移っていく。今度は贈り物をするための不用品を集めることが中心で

ある。家庭には分解されたり、こわれた数えきれない程の玩具、人形、ゲーム等がある。あるものはすぐにでも使えるが、少し時間をさけば再生できるものも多い。それらを集めて、より貧しい環境にある多くの子どもへの贈り物とするのである。また、来たるべき冬に備えて、お互いに役立つような衣服も選択される。こうして学校は、有用な贈り物の手形交換所 (Clearing house) の様相を呈してくる。真剣で、慎重な討論によって、衣服のサイズがぴつたりかどうかなどの条件が吟味される。金の寄附もあり、その一部は靴直しなどに使われる。集められた数々の品物や道具、玩具などを修繕しなければならぬ時には、修繕屋、大工、ペンキ屋が必要であり、全校に貼り紙をして希望者を募る。修繕の作業は、手工 (manual training) の恰好の機会となる。それはまさに学校の工場 (school shop) と言ってよいであろう。こうした修繕作業によってなおされた物品は、修繕すればまだ使用に耐えるものであることを、子どもや両親に暗示することによって、物の大切さに着目させるのである。したがって、クリスマスが近づくにつれて、学校全体が活動や作業のために時間が費やされていくことになる。

クリスマスの一連の計画や活動のなかには、利己的動

機よりも利他的動機が、個人的方法よりも協調的方法に訴えることが強調されていることが明らかであろう。こうした経緯から、子どもたちの間に、幅広いクリスマス の精神を啓発、昂揚、さらに再確認する場が、二十分間の M・E・においてなされたのである。

(二) 「ウイリアム・ブレイク」についての実践

ブレイクに関する主題をとりあげたのは、第四学年である。主題として成立するまでには、つぎのような経過をたどっている。

この学年は一ヶ月間、ブレイクの二、三の詩を愛誦するよう学習してきている。詩の深い意味を説明するために、教師はブレイクの生活上のエピソードについて話したところ、子どもたちは特に彼の幻想力 (visions) の逸話に陶醉してしまった。ブレイクの経験したものは、おとぎ話が現実化するようなものであって、詩には新しい意味と興味が付加された。一人の少年は、ブレイクが描いた「ウエストミンスター寺院」の絵をもってきた。もう一人は詩集のなかにあるブレイクの詩を二、三篇探し出した。第三の子は、彼の詩集と画集をもってきた。ある少女は「無心の歌」

(Songs of Innocence) を買って欲しいと母親に請うた。もう一人の少女は、百科辞典でブレイクの生涯を調べて、クラスの者に情報を与えた。⁽⁴⁰⁾

そこで子どもたちは、「このつぎのM・E・ではブレイクについて発表しよう」と決定し、授業の極致が示されるような計画を立て、その準備にたっぷり二日間を要した。

第一日目、「ブレイクの詩は、M・E・の良き主題になり得るかどうか」についての話しあいから始まる。書かれた詩を上演すればよいという意見が出される。しかし、詩は美しいものであるから、あくまでも読むためのものであることが確認され、教師が「夜」(The Night Song)の一節を読む。子どもは韻律を含む語を探す。もし上演するならば、こうした詩のリズムが失われることを知り、「彼の思想」「生まれた時」「何に興味があったか」「天使が鈴なりになった木」といった幻想力など、彼の生涯についての学習が続けられていく。その間に、「笑いの歌」「虎」「子羊」「羊飼ひ」などの詩が紹介される。そして、これらの詩を何学年の子どもが読めばよいか、が話しあわれ、来週の月曜日まで読む人を決めて欲しいと、各学年に働きかける。また、以前にブレイクについて学習し

たことのある第八学年の教師からも話を聞くことが決定される。より深くブレイクについて調べてくることで、一日目が終了。

第二日目、調べてきたことをもとに、二十分間にどのような効果的に生涯や詩を盛りこむか、について話しあいが続けられていくのである。発表の項目はつぎのようにメモされている。

「誕生、彼は洋品屋の息子であること、彼が学校へ行かなかつた理由、独学したこと、少年時代、幻想力、散歩、最初の書物、詩、いかにして芸術家となつたか、描き始めた時、彫刻、ウエストミンスターでの仕事、結婚、妻を教えたこと、死。」

「一人の子が彼の生涯について語る。九人の四年生が詩を読む、三年生が『子羊』を読む、六年生が『虎』を読む……」⁽⁴²⁾

これらのメモを参考に、発表文の素案作りに入り、それを推敲し、生涯について発表する人が選ばれる。フレデリックが発表者に決定し、さらに発表の仕方を練習するという手順が踏まれていく。

第三日目はいよいよM・E・での発表である。まず、フレデリックがブレイクの生涯について語りかける。

「われわれはウイリアム・ブレイクの詩のいくつかを読むつもりである。ブレイクはおよそ百年前にはまだ生きていた。彼は他の少年とちがって身体が強くなかったので、いつもからかわれていた。……そこで父は、学校にはいかなない方が良く考えた。彼は学校へは行かず、家にとじこもって、自分で読むことを学習した。父はブレイクには絵の才能があることを発見し、芸術学校へやりたいと思った。しかし、ブレイクはあまりにも金がかかりすぎるため、彫刻を学びたいから徒弟奉公に出たいと父に申し出た。徒弟奉公をしている間、彼はウエストミンスター寺院で五年間、像を描き、勉強を続けた。ブレイクは二十三歳の時結婚した。妻は有能であったが、読み、書きができなかった。彼は彼女に読み、書きを教え

た。妻は彼の詩をよく理解してくれた。……ブレイクには幻想力があった。ある時、彼は海岸にいて、偉い人々——それは王様、君主、貴族などすべて過去の歴史上の人物であった——の行進をみた。また、ある時には野原に出て、天使が鈴なりになっている木をみた。他の時、ウエストミンスター寺院にいて、キリストの十二人の使徒が祭壇のまわりにいるのを見たように思った。……(以下略)——」⁽⁴³⁾

フレデリックの語りのあと、前にリクエストしておいた教師の話、メモにもみられ、各学年にお願ひしておいた子どもたちの詩の朗読などでM・E・が終わる。

幼少の頃から異常な幻想力をもち、詩才や画才を示したブレイクは、よく題材としてとりあげられたようである。このM・E・は、子ども自身の興味から出発し、ブレイクを学習したことのある学年や教師にも援助をおおいでいるところに一つの特色がみられるのである。この実践の記述から、M・E・への準備は、慎重かつ念入りであったことが察知できよう。

おわりに

パーカー教授学の社会的観点について、その内的側面であるM・E・を対象にして、その目的、主題、実際にについて概観してきた。今後への課題を含めて、若干のまとめをしておきたい。

(1) パーカー教授学の基底には、近代教授学の基本的な原理がみられること。それはつぎの陳述に端的にあらわれている。

「自己活動による作業が、子どもに最も多くの利益を

もたらす。自発的に訓練することが子どもの要求であり、それは子ども自身の興味によるものであり、それらの興味のかなかに、われわれはしばしば教育的な機会を見い出す。調和のとれた責任を有する自由は、道徳的かつ知的な成長の最善の条件である。実際的な事物による現実の経験こそが、学習の本質である。種々異なった表現をするための機会には必要である。……最も効果的な、かつ健全な作業に関する動機の一つが社会的動機である。」

すなわち、ここには自己活動、興味、自発性、実物教授、責任ある自由、表現力、作業、社会的協同などが尊重されていることは明らかである。M・E・の実践や主題構成の原理として、これらの諸要素が深く浸透しているのである。

(2) M・E・は教室の授業と有機的な関連が図られていること。これらはブレイクの実践例に現れていると言える。この実践では教室の学習から発展した主題の選択、実施形態がとられており、教室の授業に生命と意味、さらには目標を与えるものであることが明白である。

一部を除いた現在の学校における集会活動、特に全校朝会や学校行事が、授業との関連が薄いことを想起する

なら、筆者はもつと学習内容に即した集会活動が導入されるべきであると考ええる。校長講話や生活指導目標の連絡に終始する全校朝会や、集会のための集会活動であってはなるまい。さらに、それは「ゆとりの時間」における勤労体験学習、夕テ割り集団による集会活動が主張される背景にある教育的価値をもつと積極的に吟味することが必要であることも含意しているのである。その意味において、M・E・は現在の集会活動や全校朝会のあり方にインパクトを与えてくれる一つのモデルを示すものであると言つてよいだろう。M・E・には時代を超越した斬新さがあり、そこに今日的な意味があると考えるからである。

(3) パーカー教授学の社会的観点は、「学校はわれわれが共に生活する場所である」点から構想されていること。そこからM・E・の場を設定し、理想的な市民を育成する恰好の機会とされているところに、その意義を見い出すことが可能である。

M・E・には学校全体を統一する意図があり、その理念にはパーカーの中心統合理論の主張と類似するものがあると言つてよからう。ここに、統一はパーカーの熱情であり、不統一あるいは分離はタブーである、とする一

貫した彼の精神を看取することが可能である。

(4) ただ、M・Eの実践は、パーカーの学校独自のものであるのか、当時の一般的な傾向として、比較的ポピュラーな実践であるのか、についてはアメリカの教授理論史上から検討をしなければならない筆者の今後の課題である。

(土越教育大学)

「注」

- (1) The Francis W. Parker School Yearbook, vol. I “The Social Motive in School Work”——以下Y1と略称——(Chicago: Press of Francis W. Parker School, June 1912) p. 3
- (2) Parker, F. W.: Talks on Pedagogics——An Outline of the Theory of Concentration (Kelllogg Co. 1894) p. 420
- (3) Parker, F. W.: Ibid. p. 450
- (4) Parker, F. W.: Ibid. p. 451
- (5) Parker, F. W.: Ibid. p. 346
- (6) 拙稿「F・W・パーカー教授等の民主主義的観点について」(『日本デモクラシー学会紀要』第二十三号 一九八二年所収)六二頁—六八頁
- (7) Y1: p. 3
- (8) Rugg, H.: Foundations for American Education (World Book Co. 1947) pp. 531—532. なお Rugg の Cremin も morning assembly という用語を使用しているが、筆者がパーカーの論文をのみ限るべし morning assembly はみあたらない

い。いずれも morning exercise と通じている。後世の歴史家が morning assembly と総称するようになったのかもしれないが、なお検討を要する課題である。

(10) Cremin, L. A.: The Transformation of the School (Vintage Book, 1961) p. 132

(11) The Francis W. Parker School Yearbook vol. II “The Morning Exercise as a Socializing Influence”——以下Y2と略称——1913 p. 7 日本の文献ではフレーネルの「朝の輪」からパーカーがヒントを得て構想したものと述べられているものが多いが、筆者が知る限りでは、フレーネルに「朝の輪」という記述はみられない。類似した用語として「朝の挨拶」「朝の贈り物」「朝の点」「輪の遊戯」「朝の祝典」などが用いられている。用語法の是非はともかくとして、パーカーはフレーネルからの影響が多大であることを考慮するなら、M・Eの淵源をたざれば、フレーネルの実践に求めることができるかもしれない。しかし、パーカーが直接フレーネルを引用している箇所はない。

(12) The Elementary School Teacher, vol. III——以下Y3と略称——(The University of Chicago Press, 1903) p. 298

T3: p. 296 (7) (8) T3: p. 297

(16) Y2: p. 7

(17) Cremin, L. A.: op. cit. p. 132

(18) 検討のうちでY2: pp. 8—10について述べられている。

(19) The Elementary School Teacher, vol. III——以下Y1と略称——(The University of Chicago Press, 1912) p. 398

(20) Y2: p. 13 (12) T3: p. 297

(22) Y2: p. 12

- (23) The Elementary School Teacher and the Course of Study,
vol. II——*小学校教員養成*——(The University of Chicago
Press, 1901) p. 173
- (24) Y2; p. 16 (25) T3; p. 302
Y2; p. 8
- (26) Y2; p. 8
- (27) *Y*の表をT2; p. 174から転載したものをいふ。
- (28) Catalogue of the Francis W. Parker School——*パーカー
略称*——(Press of Francis W. Parker School, 出版年無記載)
p. 30
- (29) *Y*の記述をC; pp. 30—31, *Y*T3; pp. 299—301を参考として
筆者が整理したものをいふ。
- (30) *Y*の記述はC; p. 30 T3; 301—302を参考にして筆者が整
理したものをいふ。
- (31) Y2; p. 14 (32) T3; p. 299
- (33) Y2; p. 16 (34) C; p. 30
- (35) Y1; pp. 15—22
- (36) (37) (38) Y1; p. 16
- (39) Y1; pp. 17—21
- (40) Y2; p. 19 (41) (42) Y2; p. 25
Y2; p. 26
- (43) Y2; p. 26
- (44) Y1; p. 11 なお、ラングは「Y1にはわれわれがかつて経験し
てきた進歩的な哲学の最も立派な陳述の一つが含まれていた」
(Rugg, H.; op. cit., p. 539)と述べている。
- 〔本稿は、日本教育学会第41回大会（於、東北大学）において発
表したものに加筆したものである。〕